

平成21年 4月 30日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19820038  
 研究課題名（和文） 英語の名詞複数形態の発展

研究課題名（英文） The Development of the Nominal Plural Forms in English

## 研究代表者

堀田 隆一 (HOTTA RYUICHI)  
 中央大学・文学部・助教  
 研究者番号：30440267

研究成果の概要：英語の名詞複数形の-sが現代英語にみられるように圧倒的に優勢となる傾向が現れたのは、初期中英語期（1100～1300年）である。本研究では、電子コーパスや語彙拡散理論を援用しながら、なぜ（WHY）どのようにして（HOW）この時期に-sの拡大が進行したかを明らかにしようとした。結論として、初期中英語期における名詞複数形態の発展は、種々の言語内的・外的要因により、およそ語彙拡散理論が予想する型に従って進行したことが判明した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,220,000	0	1,220,000
2008年度	1,220,000	366,000	1,586,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,440,000	366,000	2,806,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語史、コーパス、複数形、形態論、語彙拡散、中英語

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 英語の名詞複数形態の通時的発展という問題は、-s語尾の拡大という観点から、多くの概説書で触れられてきた話題である。一見すると研究し尽くされているかのように思われがちだが、驚くべきことに、通時的な記述を含む詳細な研究は、Roedlerの博士論文 (*Die Ausbreitung des 's'-Plurals im Englischen*. Vol. 1. 1911. Vol. 2. 1916.) を除けばほとんどない。英語史の概説書では「古英語で非-s語尾複数をとった名詞の多くが中英語以降に-s語尾複数をとるようになった」と変化の結果を示して終わるだけのものが多く、変化の過程について踏み込んだ

記述のないのが普通である。英語史において知名度の高い基本的な話題であるにもかかわらず、根拠となる事実の記述が本格的になされてこなかったという意外な事実こそが、本研究に着手するに至った最大の動機である。

(2) 本研究者は過去10余年間にわたり名詞複数形態の発展というテーマを掲げて研究してきた。なかでも中心的な関心は、-s語尾複数が一気に拡大する初期中英語期における複数語尾の分布変化であった。初期中英語期は、残存するテキストの多くについて方言的位置づけが判然とせず、言語的にも揺れが

多く不安定な時期であるとして、古英語期や後期中英語期に比べ、研究しにくい領域であると考えられてきた。とりわけ、言語データの証拠価値にかかわる文献学的な問題――初期中英語期のテキストに表される言語が原著者の言語なのか、写字生の言語なのか、標準化された書き言葉なのか、あるいはそれらの混合なのか――が不可避的に生じるため、言語分析のしにくい時代であるという評価が定着していた。しかし、方言学やテキスト批評における近年の著しい研究の進展、とりわけ Laing らにより編纂中の *Linguistic Atlas of Early Middle English* とそれに付随する諸研究により、初期中英語期に対する新しい視点からの研究が可能になってきている。本研究者は、このような英語史研究の新しい潮流を受け、名詞複数形態の発展史を記述する上で従来「穴」となっていた初期中英語期の形態分布を、特に詳しく調査する必要があると認め、本格的な研究を開始した次第である。

(3) さらに、本研究期間の当初には、文献学の生命線である図書・雑誌について、少数の主要なもの以外は所属する大学の図書館では手に入らず、研究に支障をきたす状況であった。また、研究上の基礎資料すら研究室にそろっていない状況であった。したがって、図書・雑誌への投資が火急であり、是非とも科学研究費の補助金が必要であった。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の主たる目的は、英語における名詞複数形態(主に-s語尾)の通時的な発展を、古英語期から現代英語期にわたる通史として記述することである。なかでも、初期中英語期は、複数形態の発展史において最も重要な時期である。また、同時代は近年の研究の進展により新しい視点から見直されるべき時代である。したがって、初期中英語期の分析に特別の注意を払うこととする。

(2) 本研究のもう一つの目的は、上記のように名詞複数形態の発展を論じる際に、「どのように」(HOW)と「なぜ」(WHY)の二つの問いに答えることである。特に言語変化において同定しにくい「なぜ」の問題を積極的に掲げたことは強調しておきたい。

(3) 本研究のさらにもう一つの目的は、複数形態の問題を通じて「複数の言語変化は束となって進行する」という新しい言語変化観を提示することである。初期中英語期に特別な注意を払う理由の一つは上述したが、研究の発展性という観点からもう一つ挙げられる。初期中英語期には、-s語尾複数の拡大のみならず、格の水平化、文法性の消失、冠詞形態

の統一化といった、現代英語の特徴の形成に直接かかわる諸言語変化が活発に起こっていた。これらの変化は互いに深くかかわりあい、束となって、英語の構造を大きく変化させたと考えられる。したがって、名詞複数形態の通史記述という本研究のテーマは、独立した問題ではなく、並行する問題(例えば、格の水平化)と密接にかかわりあい、全体として英語史の記述に貢献するという性質をもっていると考えられる。

## 3. 研究の方法

(1) 研究の方法論としては、現代的な視点を前面に押し出すことを目指し、①最新の電子コーパス (*Text Database of Linguistic Atlas of Early Middle English*)、②近年充実してきた歴史方言学や接触言語学の知見、③言語変化の一般的傾向を論じる語彙拡散理論、を援用した。

(2) 研究の手順は以下の通りである。まず初期中英語期のテキストから大量の名詞複数形態を拾い出す。刊本により地道に手作業で拾い出す一方で、上述の電子コーパスによりコンピュータを利用して取り出すことも積極的に試みる。テキストを選定する際には、可能なかぎり各方言や各時代が代表されるようにし、のちに方言間・時代間比較が可能となるように留意する。次に、そのようにして収集した名詞複数形態の具体例を、名詞の属する形態タイプ、文法性、置かれている統語的位置などにより分類し、方言・時代ごとに統計処理する。結果、どの方言のどの時期が相対的に変化のスピードが速いか、あるいはどの名詞が複数形態の変化を経てどの名詞が経なかったのか、などが判明する。この結果を、言語変化の進行の仕方についての一般的傾向を論じる語彙拡散理論を援用して記述する。

(3) 以上の手続きで明らかにされた「変化がどのように進行したか」(HOW)という事実に基づき、次に「そのような変化がなぜ起こったか」(WHY)を探るために、言語内的な動機付けと言語外的な動機付けという視点を設定する。言語外的な動機付けについては、古ノルド語との接触という視点を導入し、古ノルド語と英語の屈折変化の比較や両言語からの具体例の比較によって、英語における名詞複数形態が古ノルド語によって間接的に影響を受けた可能性を論じる。

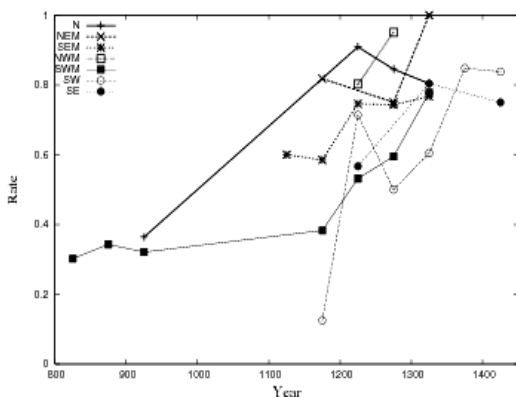
## 4. 研究成果

(1) 本研究の結果明らかにされたことは以下のようにまとめられる。初期中英語期における名詞複数形態の発展は、種々の言語内的・

外的要因により、語彙拡散理論が予想する型に従って進行した。

(2) 本研究の成果は、2009年2月に出版された拙著に反映されている (*The Development of the Nominal Plural Forms in Early Middle English*)。同著では、英語における名詞複数形態 (主に-s 語尾) の通時的な発展を、主に初期中英語期に焦点を当てて総括的に記述 (HOW) し説明 (WHY) した。結果、従来の研究で十分に扱われてこなかった話題についての比較的大規模な研究報告となった。以下では、本研究の主な成果について、HOW と WHY の二つの観点から要約する。

(3) 初期中英語期における名詞複数形態の発展の仕方 (HOW) については、およそ語彙拡散理論が予想する型にしたがって進行したというのが結論である。語彙拡散理論は、多くの言語変化に見られる典型的な進行パターンを定式化したものである。具体的には、言語変化はゆっくりと始まるが、ある段階で急激に速度を増して一気に進行し、最後に再び速度をゆるめるという S 字曲線を描くとする。坂道を転がり落ちる雪玉の連想から **snowball effect** とも呼ばれる。名詞複数形態において-s 複数の拡大の様子を、7つのイングランド方言ごとに時間軸に沿ってグラフ化すると、下図ようになる (すべての名詞が-s 語尾複数をとる場合に値は 1.0 となる)。方言によって少なからず差があるものの、全体として S 字に沿う曲線を描くことが分かる。もっとも、南部系方言では典型的な S 字曲線を描かず、SWM (南西中部) についてはむしろ N 字曲線とでもいべき変化の型を示しており、そこでは-s 複数と並んで-n 複数も拡張していたという特殊な事情が働いていたことも明らかにされた。初期中英語期に-s 複数が拡張したという事実は従来より知られていたが、具体的にどのように拡張したかを示した研究はなく、このグラフが得られたことは、研究史において大きな意義を持つものと信じる。



(4) 上記のように、名詞全体を対象にして複数形態の発展を方言ごと時代ごとのマクロな視点から記述したもののほかに、特定の基準で選び出されたいくつかの名詞に着目し、その複数形態がどのような方言分布を示し、通時的な発展を遂げたかというミクロな視点の記述も試みた。その結果、名詞の属する形態タイプや文法性が、変化の時期や速度に關与的であることが判明した。こうした個別の名詞の発展史も従来の研究では本格的に扱われて来ず、それを明らかにしたことは本研究の独自の成果である。

(5) 初期中英語期において名詞複数形態が発展した原因 (WHY) としては、大きく分けて言語内的・言語外的な動機付けの二種類があったというのが結論である。言語内的な動機付けとしては以下のようなものが挙げられる。①名詞の属するクラスが変化しうる可能性、②屈折語尾における母音の曖昧化と鼻音の消失、③名詞形態論の体系的再構成、④文法性の消失、⑤音声・音韻的条件、⑥統語上の一致、⑦意味論・語彙論的条件、⑧格の融合との連動、である。これらの要因のすべてが同じ程度に關与的であったわけではなく、①~④が特に強い要因として働いたものと考えられるが、全体が合わさって、複数形態の変化に体系的な変化をもたらしたと考えるのが適切であろう。なお、⑧に関しては拙著論文で詳しく扱ったが、複数形態の発展と格の融合が、あたかも手を携えるかのように相乗的に進行したことが明らかになっており、いくつかの相互に関連した言語変化は束になって進行する傾向があるという言語変化像を示すことができた (“Language Changes Walking Hand in Hand: The Spread of the s-Plural and Case Syncretism in Early Middle English”)。このことは本研究のもう一つの成果であり、今後は類例を多く探して、この言語変化観を補強したい。

(6) 言語外的な動機付けとしては、古ノルド語の英語への間接的な影響を主に論じた。-s 語尾複数の拡張が特に北部方言において著しかったことと、同時代の英語の多くの言語変化が古ノルド語の影響と無縁ではないことを考え合わせると、両言語の言語接触を重視しないわけにはいかない。そこでまず英語と古ノルド語の名詞の屈折変化を比較してみると、複数形への影響が想定されるに足る十分な類似性があることがわかる。次に、英語と古ノルド語の対応する名詞の複数形を並置してみると、多くのペアで英語の-s に対して古ノルド語の-r が対応していることがわかる。この対応こそが、すでに言語内的に始まっていた-s 語尾複数の拡大を間接的に助長した要因だったのではないか。この仮説

は完全に証明することは不可能だが、仮説を支持するような豊富な例や近年の接触言語学の知見に鑑みて、十分にあり得るシナリオであると考ええる。

(7) 以上のように、本研究では、初期中英語期における名詞複数形態（特に-s 複数）の発展を方言ごとに記述（HOW）し説明（WHY）した。本研究テーマは、英語史において基本的な話題と考えられるにもかかわらず、意外にも従来の研究ではほとんど忘れ去られていた。本研究はそのような基本的な話題を総括的に扱ったものであり、英語史研究の穴を埋める役割を果たすものと考えられる。方法論上の貢献としては、近年注目されてきている語彙拡散理論（Lexical Diffusion）を援用したことを指摘する。単に理論を援用しただけでなく、理論に対して修正や再考を迫るような具体的な事例が本研究から出されたことは強調しておきたい。具体的な事例と抽象化された理論とのフィードバックは理論の発展にとって欠くことのできないものであり、本研究の意義の一つもその点に存すると言える。また、テキストからの事例収集に最新の電子コーパス（Text Database of *Linguistic Atlas of Early Middle English*）を利用できたこと、しかもその出版前の版を利用できたことにより、本研究は同コーパスに基づいた研究としては最も早いものの一つに数えられることとなった。同コーパスの前評判は高く、英語史研究に大きく資するものと目されているだけに、本研究もそれに応じて価値のある研究であると信じる。

(8) 最後に、反省と展望を記す。本研究の当初の目的の一つに、複数の言語変化は束となって進行するという言語変化観を提示することがあった。その目的を完全に果たすには至らなかったものの、上述したように複数形態の発展と格融合との相関関係は明確に示すことができたし、同様に文法性の消失との相関関係も示すことができたと考える。また、当初の研究目的としては、初期中英語期のみならず古英語期から現代英語期にわたる複数形態の通史を記述することを目指していたが、最終的に研究期間内に扱うことができたのは、後期古英語期と後期中英語期のみだった。現代英語までを包括できなかったことは反省すべき点である。ただしこの両時期のテキストについては、文献学的な精緻な読みに基づいた研究をなしえたと信じる。今後は上記二つの反省点を銘記し、引き続き同じ主題で当初の計画通りに研究を進めてゆくつもりである。本研究の成果は主に著書の出版によって公表したが、改めて論文執筆や学会発表等により積極的に公表していきたい。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① Hotta, Ryuichi. “Language Changes Walking Hand in Hand: The Spread of the *s*-Plural and Case Syncretism in Early Middle English.” *Individual Languages and Language Universals*. Ed. Michiko Takeuchi. Yokohama: Center for Language Studies at Kanagawa U, 2008. 95-124. 査読あり。

〔図書〕（計1件）

- ① Hotta, Ryuichi. *The Development of the Nominal Plural Forms in Early Middle English*. Hituzi Linguistics in English. 10. Tokyo: Hituzi Syobo, 2009. 316 pp.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

堀田 隆一（HOTTA RYUICHI）  
中央大学・文学部・助教  
研究者番号：30440267

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし